

横断面図を用いた中心市街地を含む河川空間の景観分析

環境システム工学科 西村 渉

都市河川の魅力は都市によって様々であり、個々の都市色が感じられる点が特徴的である。つまり都市河川景観とは河川自身の魅力はもとより、周辺都市との関係によって景観の質が形成されているのである。そこで本研究では、都市と河川との関係に配慮した都市河川景観について考え、「街と河川のつながり」に着眼した景観分析を行うことで両者の関係を明瞭にすることを目的とした。現地調査を行い、空間構成の把握に用いる横断面図を市街地まで含めて作成し、それを基に「街と河川のつながり」に関する分析を行う。そして都市河川景観の分類化を行いパターンごとに特徴を述べ、考察を加える。

1. はじめに

都市生活において身の回りの自然は、人々に親しみや安らぎなどを与える。人口が集中する市街地ではその数少ない自然は特に貴重であり、河川は其中でも代表的であるといえる。一般的な河川においては多自然型河川整備など、環境に配慮することで景観的にも良好となった事例は多くある。それに対し都市河川においては、周辺都市の影響を多大に受けるため良好な空間形成が難しい。しかし都市河川には、市街地と自然といった相反するものが隣接して存在する空間のおもしろさがある。そこに「都市の顔」となり得る都市河川景観の魅力や可能性があると考えている。そこで本研究は「街と河川の関係」を主題とした都市河川景観の分析を行う。

2. 研究対象

研究対象となる河川について以下の2点の条件を定めた。

- ①「街と河川の関係」を主題とするため、都市河川を有する都市が前提となる。そこで「中心市街地整備改善活性化法」¹⁾により各市町村が定めた中心市街地の範囲(図-1)に隣接・貫通した河川を有する都市であることを条件とした。
- ②中心市街地に関しては、都市色の際立つ成熟した都市であることが重要となる。そこで、政令指定都市及び県庁所在地であることを条件とした。

結果、研究対象は九州内における前述の条件に適合した7河川：那珂川(福岡市)・紫川(北九州市)・中島川(長崎市)・白川(熊本市)・大分川(大分市)・大淀川(宮崎市)・甲突川(鹿児島市)に決定し、現地調査を行った。



図-1：中心市街地図(熊本市)

3. 横断面図による分析

3-1. 横断面図の作成

本研究では河川空間と市街地の関係を検討するため、両者を一体の空間として捉えている。そこで検討に際しては、河川より市街地まで含んだ横断面図を地物（建築物・樹木等）も含み作成した。横断面図を用いたのは、都市と河川の関係を生動的な空間構成として簡易に分析できるためである。

現地調査において作成した横断面図は、河川横断方向に連続した空間が広範囲に渡って示しており、また歩行者レベルにまで合わせ細部のディテールまで描画してある。作成にあたっては、2. 研究対象に挙げた7河川において筆者自らが現地調査を行った。そこで中心市街地内の利用形態などを検討し、断面位置を決定した後、河川ごとに2~4断面を作成した（図-2）。範囲は水際より0~150mとし、国土交通省国土地理院発行の1/2500 国土基本図より地形も考慮した。

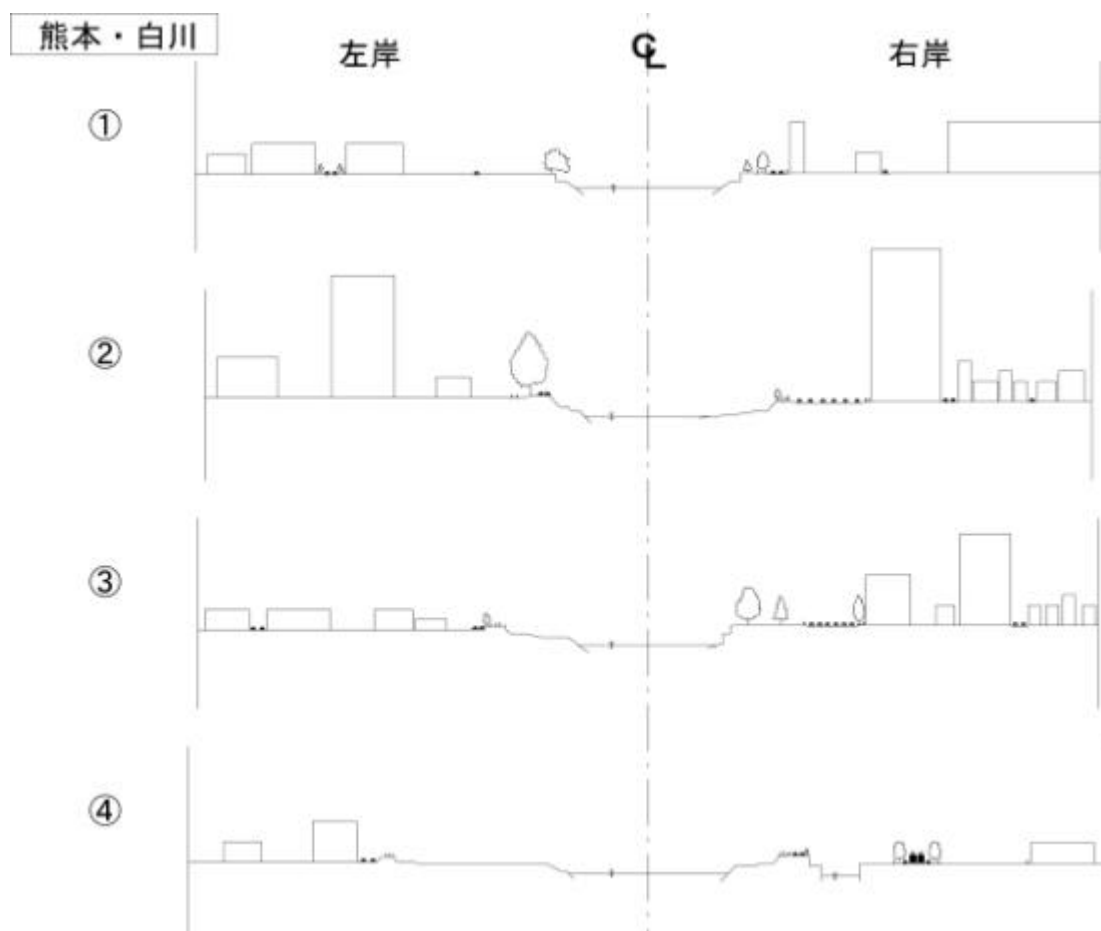


図-2：分析用横断面図作成例（熊本市・白川）

3-2. 新たな 河川～市街地 の捉え方

調査後、各河川の横断面図を分析した結果、水際～河川に面した建築物の範囲において、複雑かつ細やかな構成が見られるという特徴に注目した(図-3)。またこの特徴から、水際～河川に面した建築物の範囲に「街と河川をつなぐ」役割が集約されていると考えた。

これより、河川～市街地において次の3つのゾーンに分かれるものと考えた(図-4)。まず河川流水の範囲を『水』ゾーンとし、次に水際～河川に面した建築物の範囲を、2つのものをつなぐイメージとして「節」と捉え、『節』ゾーンとした。最後に河川に面した建築物以降の範囲を『街』ゾーンとした。

また各ゾーンの性質も各々に異なる。『水』ゾーンは、水しぶきや流水音など流水に起因した豊かな知覚体験の源となる、人的にも景観的にも特異なゾーンであると言える。一方『街』ゾーンについては、多種多様な諸活動が見られ複雑な構造となっている。しかしこの諸活動についての詳細は他研究にゆずり、本研究では一般的なものとしてのみ取り扱う。

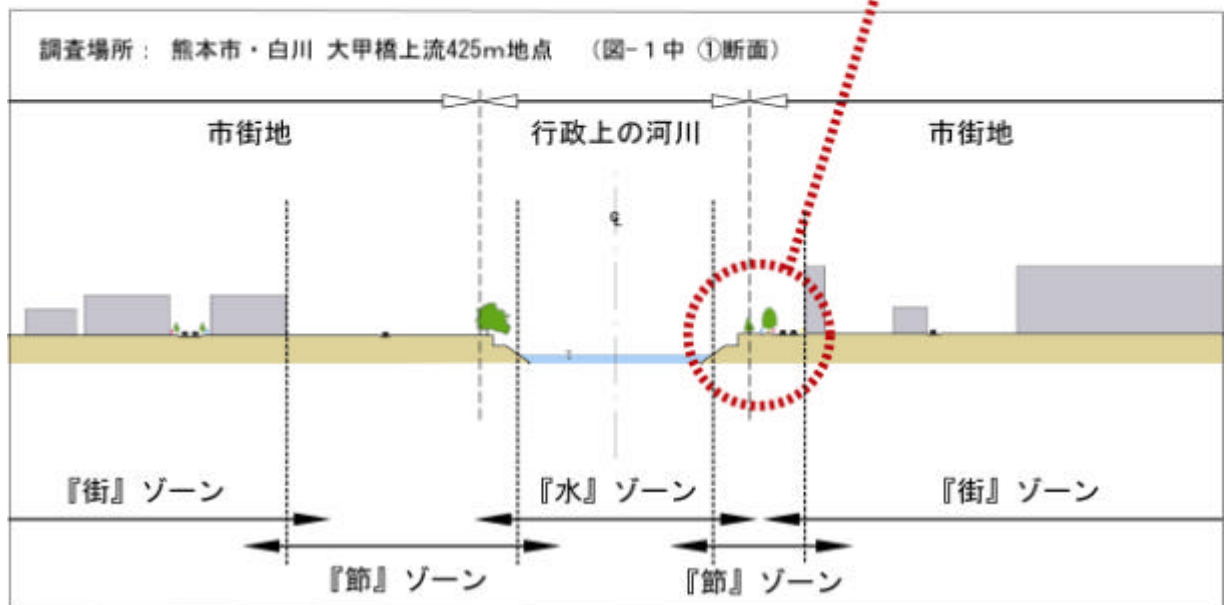
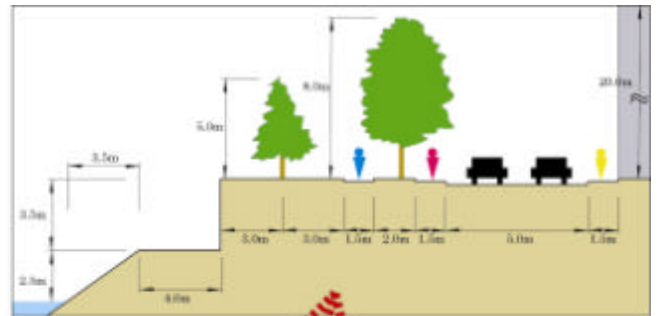


図-4：新たな 河川～市街地のゾーン概念

そしてここで注目するポイントは『節』ゾーンである。まず河川と市街地をつなぐ役割に焦点が絞られているが、『水』・『街』ゾーンの両方の影響を受ける空間でもあり、他のゾーンに比べ際立った複雑さがある。また河川景観の差異が特に色濃く出る範囲としても重要である。

一般的な河川空間の範囲に対する概念では、低水敷・高水敷・堤防敷までがいわゆる行政上の河川として捉えられ、河川のみ市街地のみで整備開発が行われてきたため、本質的な都市と河川との良好な関係が作られにくいものであったと考える。それに対し、本論では「街と河川をつなぐ」考えを『節』ゾーンという形で示し、具体的な範囲として明確した。以降は『街』ゾーンと『水』ゾーンとをつなぐための『節』ゾーンという位置付けで、その具体的な構成に関する考察を行う。

4. 『節』ゾーンの分析方法

4-1. 人の活動を促す空間

本研究で主題としている「街と河川をつなぐ」こととは、例えば「流軸方向から見た一体的な景観」といった、いわゆる構図論的な景観の類ではない。河川空間では必ず人々が何らかの活動を行っているため、例えば「人が河川まで足を運びやすくなる景観」といった、人の活動を促す景観であることが重要だと考えた。

実際の空間デザインを行う際も、対象となる空間内で行われる人の活動を明確にすることで、その活動を実現するのに必要な空間構成を明らかにすることができる²⁾。したがって、『街』ゾーンと『水』ゾーンといった質の異なるものをつなぐためには、『節』ゾーンが「人の活動を促す空間」であることが必要だと考えた。

また人の活動とは、「知覚」（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）と「行為」（座る・立つ・歩く・寝る・読むなど）の2つを基本として大別できる。ここでは、「知覚」においては「視覚」、「行為」については「移動」及び「滞留」の2つにまとめて考える。

4-2. 『節』ゾーンの評価基準

前節の「人の活動を促す空間」において、「移動・滞留」し易いことが一つの評価となる。「移動・滞留」の行い易さとは、「移動・滞留」可能な要素（以下「要素」とする）があるかどうかで判断できる。歩道があれば「移動」し易く、公園や緑地があれば「滞留」し易い。したがってここでは「要素」の有無を、「人の活動を促す空間」における一つの評価基準とした。

また、歩道や公園などが「移動・滞留」を直接的に生起させる「要素」であるのに対し、水際を散策する人や、高水敷より水面を眺める人など、水辺や岸辺では流水が間接的に関わった「移動・滞留」の生起が多く見られる。これは3-2で述べた、豊かな知覚体験の源となった流水の「知覚効果」によるものであると考えられる。そこで、生起する活動が河川空間らしい点であることも踏まえ、水辺や岸辺もまた「移動・滞留」が生起し易い「要素」として考え、評価できるものとした。

ここで横断面図上の『節』ゾーンにおける、以上の「要素」をまとめると、

移動要素：歩道、公園や緑地内のプロムナード + 水辺、岸辺 など

滞留要素：樹木の木陰、公園、広場、建築物内 + 水辺、岸辺 など

が挙げられた。これらの部分を横断面図上の『節』ゾーンにプロットすると、『街』ゾーンより『水』ゾーンまで「要素」が連続していることが分かる（図-5）。

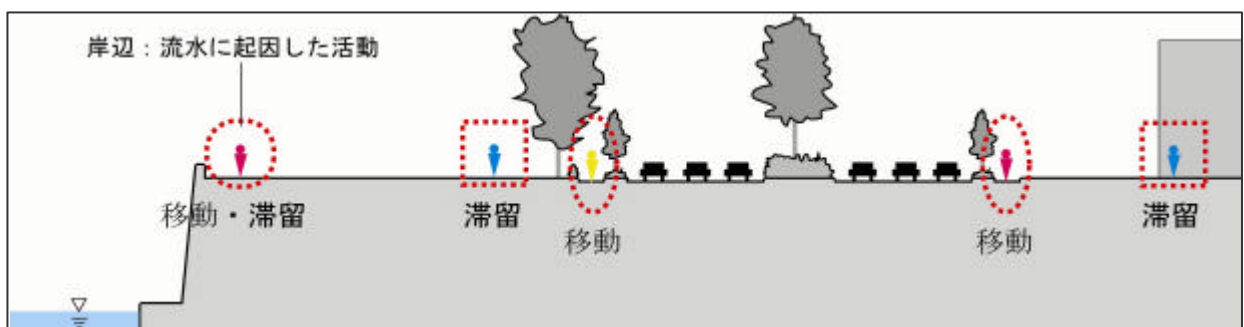


図-5：『節』ゾーン内の移動と滞留（鹿児島市・甲突川）

4-3. 空間のつながり

前節では、『節』ゾーン全体の評価を「要素」の有無としたが、ただ「要素」があれば良い訳ではない。川沿いの歩道を散歩する人が休憩する時に、休憩場所となる川に面した公園があるのにも関わらず、見えなかったり、行けなかったりするようでは、その歩道と公園の間に「人の活動を促す空間」としての機能があるとは言えない。つまり「要素」間のつながりがなければ「要素」を有していても意味がないということである。そこで本節からは、その「要素」間のつながりがどのように構成されているかを検討する。

まず隣り合った「要素」に注目し、その間のつながりをいかに定義するか検討した。その結果、4-1で述べた「知覚」と「行為」を基とし、以下のように定義した(図-6)。

①「視覚」的なつながり：一方の要素内からもう一方の要素が見えること。

②「往来」的なつながり：またその要素間を往来できるとつながりはより強いものとして評価できる。また前節より、水辺や岸辺部分においては、「知覚効果」による流水とのつながりが既にあるが、「行為」も踏まえ改めてそのつながりの定義を示す(図-7)。

①'「知覚」的なつながり：流水部分が知覚(主に視覚)可能になっていること。

②'「親水」的なつながり：また水際まで行けるようになっているとつながりはより強いと評価できる。

本論では、以上の①,②及び①',②'のつながりがある時、「要素」間及び水辺・岸辺部分に一体的な「人の活動を促す空間」があると定義した。

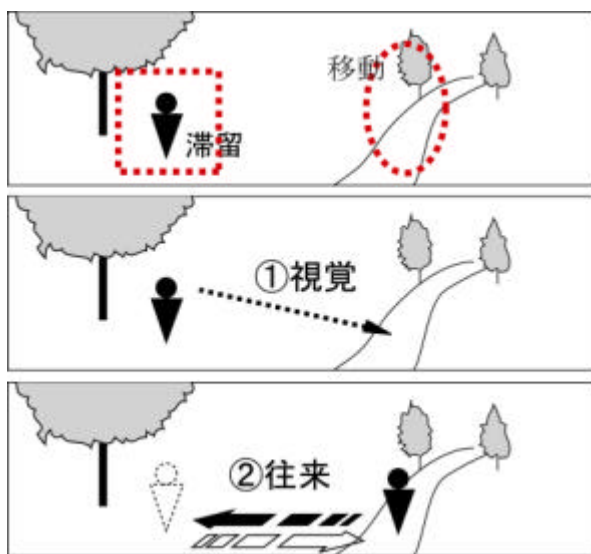


図-6：「要素」間のつながり

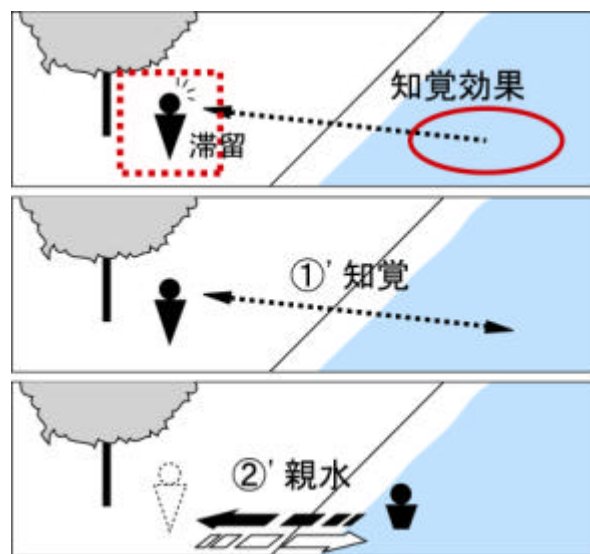


図-7：流水が対象となる時のつながり

これら「要素」間単位をつなぐ「環」と定義した。また図-8においては、両要素に人がいる時の状態も踏まえて図化することで、人の諸活動を含めた空間を概念的に記述することができるようになり、以後の分析・検討の基準として用いることにした。



図-8：図化した「環」

4-4. 「環」のパターン分類

地形・地物を介すると「視覚（知覚）」及び「往来（親水）」の程度に差が生じてくる。その差によって「環」にも性質の差が生まれ、つながりに強弱が出てくる。ここでは地形・地物が「要素」間にある時を仮想的に考え、「環」がどのような「つながり具合」になるか検討した。その結果として、つながりの強い方から順に以下の3つのパターン分類を示す。

- (1) 「往来環」(図-9, 10) : 「視覚（知覚）」と「往来（親水）」
 …… 要素が見え、かつそこまでに障害がなく容易に行ける状態。
- (2) 「知覚環」(図-11, 12) : 「視覚（知覚）」のみ
 …… 要素は見えるが、直接そこまで行くには障害がある状態。
- (3) 「間接環」(図-13, 14) : 間接的な「視覚（知覚）」
 …… お互いに見える地物（主に樹木）が両要素より象徴的に見えランドマーク³⁾となり得る時、間接的な視覚のつながりがある。また対象が流水の時には、柳などの岸辺植物を知覚する時⁴⁾、間接的なつながりが生まれる。

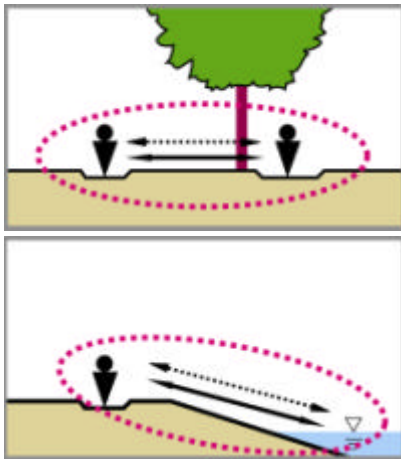


図-9, 10 : 「往来環」

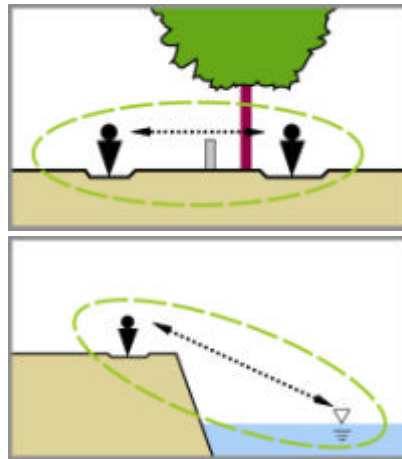


図-11, 12 : 「知覚環」

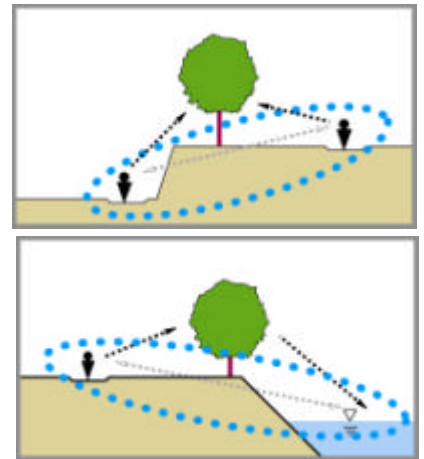


図-13, 14 : 「間接環」

さらに、『節』ゾーンにおいてこれらの「環」が、連続してつながっている状態より、『節』ゾーン全体の「つながり具合」をこの3パターンより明瞭に把握できるようになる(図-15)。この連続したつながりを「鎖」として定義し、次章から分析の基準として用いる。

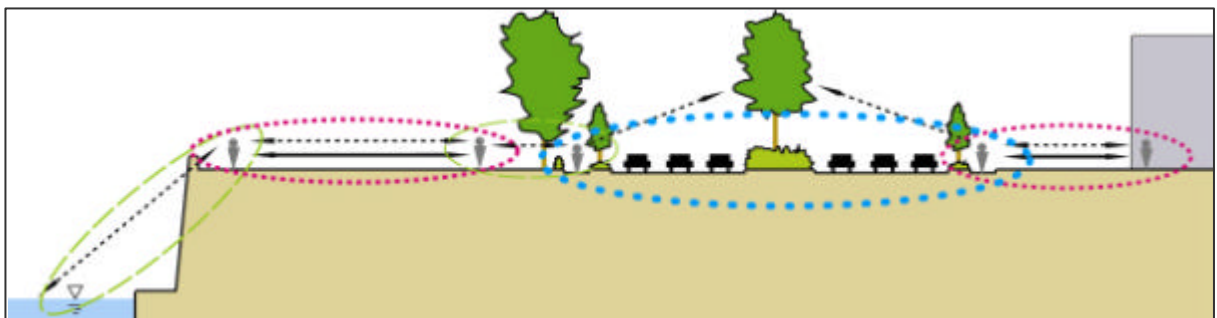


図-15 : 「鎖」によるつながり具合の把握

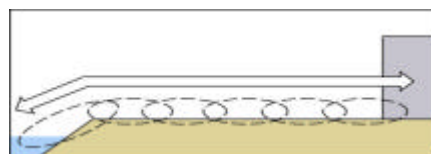
5. 調査対象の分析

5-1. 「鎖」の構成による分類

『節』ゾーンにおいて、前述の「鎖」の定義により調査対象における『水』ゾーンより『街』ゾーンまでのつながりを分析し、その結果として以下の4パターンに分類された。ここでは各パターンにおける現状の代表的事例をその特徴と共に紹介する。またこの分析は、調査を行った九州7河川的全横断面数20断面より40節（ 20×2 （右岸・左岸）=40）を対象としたものである。

A.連鎖型（全40節中20節）

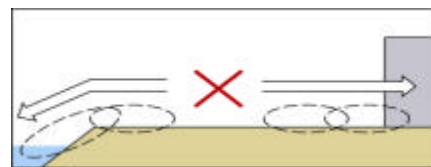
形態：『水』ゾーンから『街』ゾーンまで「鎖」が連続している。
特徴：『水』と『街』のつながりが連続的に行われており、比較的つながりに障害がないことから、『水』から『街』まで良好な「つながり具合」にあると評価できる。



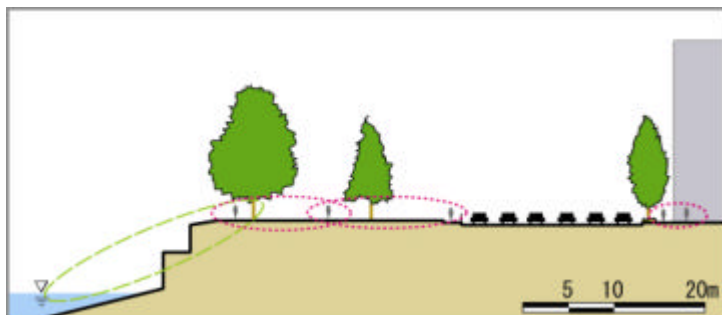
※連鎖型は当該する事例が多いので、次節においてより詳細に検討する。

B.分鎖型（全40節中8節）

形態：「鎖」が間で切れており、『水』と『街』が分かれている。
特徴：間の部分で、幅の広いもしくはレベルの高い位置にある車道などによりゾーンが切断されている。河川まで行くのに、強い遮蔽感を受け、街と河川とのつながりを失っている。

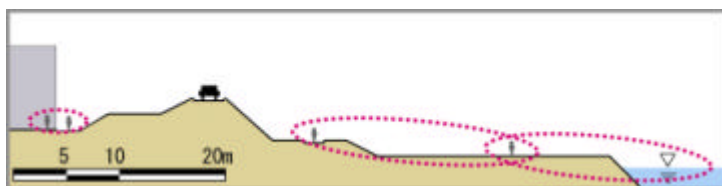


【白川・右岸③】（主要幹線道路による切断）



河岸に公園があり、河川に人の活動が多く集まる可能性がある。一方建物の前に歩道があり、人の出入りによる活動も見られるが、間にある国道が6車線と広い幅をもっているため、途中で人の視線と動きが遮断されている。このように都市の主要幹線道路が河川と並列して走っている例は他の都市においても多く見られ、街と河川との結びつきを切断している代表的なパターンであるといえる。

【大分川・左岸①】（高いレベル位置の車道による切断）

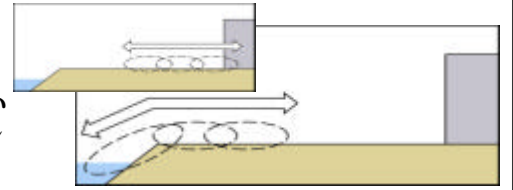


堤防の高水敷に車道があり、その脇に歩道などは整備されていない。堤防敷・堤内地から車の走行を見上げる形で見ることになるため、心理的圧迫感が強い。堤防の向こう側へ行こうとする時、堤防が街と河川の壁となってしまう例である。

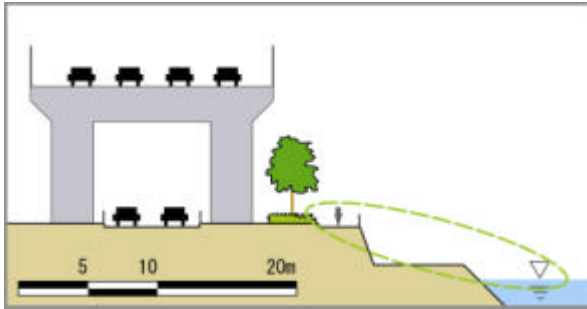
C.偏鎖型（全40節中5節）

形態：『水』又は『街』のどちらか一方に「鎖」が偏っている。

特徴：『水』または『街』側のどちらかがつながりを放棄している。人の出入りのない障害物で遮断されていたり、ゾーン間の往来ができないパターン。

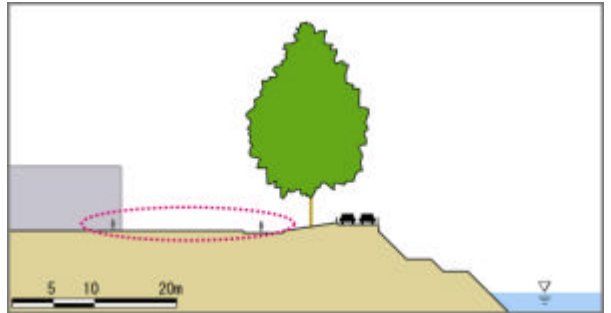


【紫川・左岸①】（大型障害物による放棄）



河岸沿いに都市高速道路が走っているため、街からの人の視線・動きを失わせていると共に、河岸の歩道で移動する人の、街の方への意識も切断させてしまっている。このような障害物があると、河川のみが閉鎖的な空間になってしまうという例である。

【白川・左岸②】（活動場所無整備による放棄）

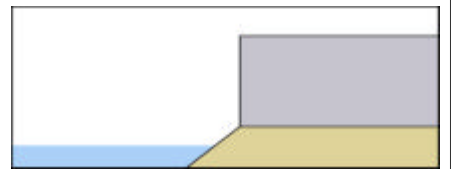


建物内外での活動は見られるが、間の車道による切断により、本来見られるはずの水辺での活動が消失している。分鎖型に似た例であるが、河川での要素がみられない点で異なり、また護岸がややレベルの高い位置までであるため、街からは河川空間が「見えない庭」になっているのが特徴である。

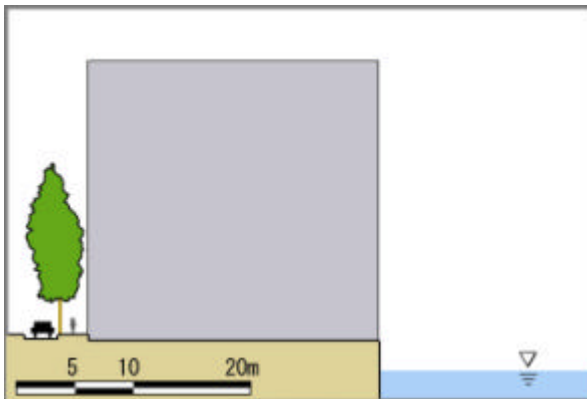
D.無鎖型（全40節中7節）

形態：「鎖」がなく、『節』ゾーンそのものがない。

特徴：『水』ゾーンに建築物が接しているか、もしくは人が入っていない（車道のみ）。『水』と『街』の関係が直接的であるが、間に人の活動がなくつながりは薄い。

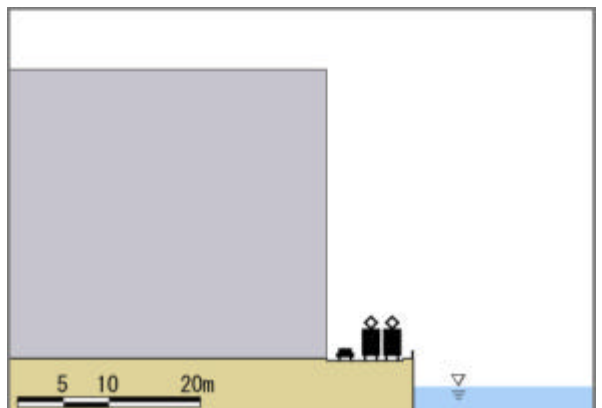


【那珂川・左岸①】（完全接水）



河川まで建物が迫り、護岸に延長するように鉛直に切り立っている。建物内から河川の様子が直接うかがえるため、つながりが強いようにも捉えられるが、建物内からしか河川が見えない点を考えると、街と河川は本質的にはつながっていないと考えられる。

【中島川・左岸②】（非活動要素介入）



建物と河川の間に車道と路面電車の線路だけで、人の活動するスペースがなく、河川側に建物からの人の出入りも見られない。車や路面電車内からは水面を間近に見ることはできるが、やはり街と河川の間は比較的に薄いとえられる。

5-2. A.連鎖型の詳細分類

前節では『街』から『水』まで連続した「鎖」の有無より4パターンを示す結果となった。ここでは全体の約半数を占める A.連鎖型 のパターンを、ゾーン内の活動内容よりさらに詳細に分類する。また A-1 より A-4 までは掘込み河川、A-5、A-6 は堤防河川となっている。

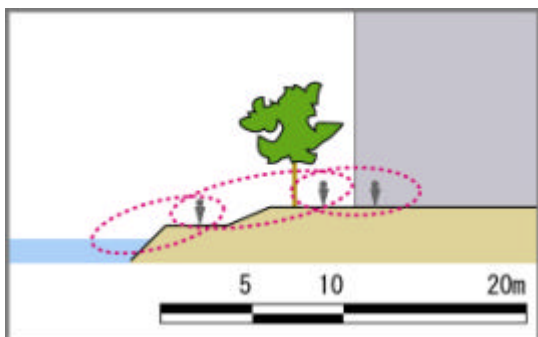
A-1.親水型

形態：『街』から『水』までが「往来鎖」でほぼつながっている。

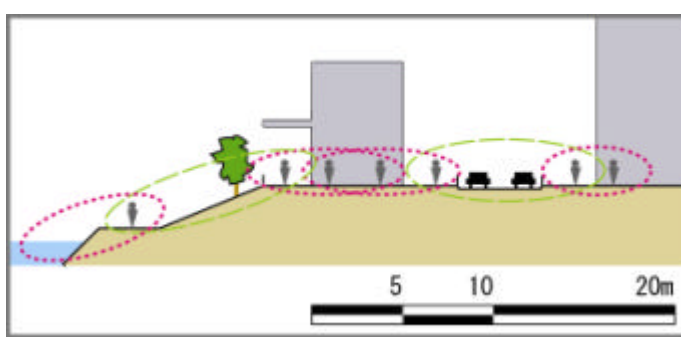
特徴：水辺や護岸の親水性が高く、『街』側から『水』側まで抵抗なく行けるような形状になっている。



【紫川・右岸②】



【紫川・右岸③】



河岸に立つ建物から水際まで傾斜の緩やかな護岸形状になっており、直接往来することができる。低水敷は河川に接し、移動・滞留どちらにも適したスペースとなり、人の活動も多く見られ、水辺に一体となったデザインである。

河岸の建物が河川に取り込まれるように建ててある。利用用途からもそれ自体が街と河川を結ぶものとして位置付けられているため、「親水性の高い建物」と言えるであろう。護岸は左の例と同様な形状をしており、建築物を間においてもつながりを断たないのが特徴的な例である。

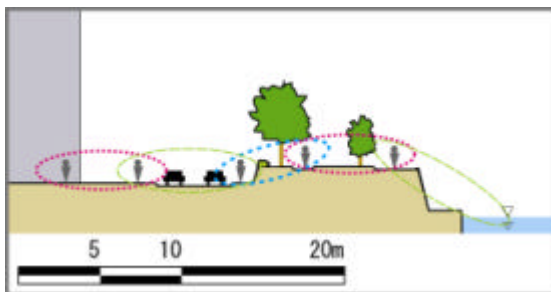
A-2.ステージ型

形態：『街』側より見たとき、1~1.5m程度レベルの高くなる部分が『街』から分節されている。

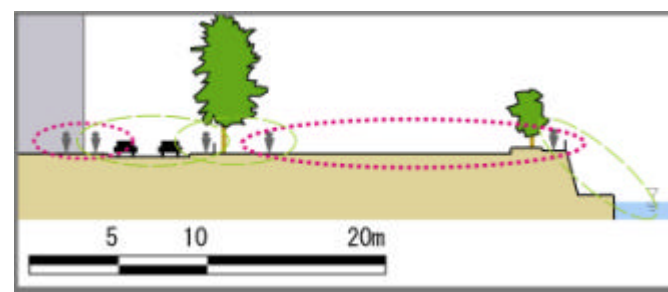
特徴：『街』とのつながりが薄れ、河川まで行きづらくなっており、ステージ上では河川にのみ向かった活動が見られる。



【甲突川・左岸①】



【甲突川・左岸③】



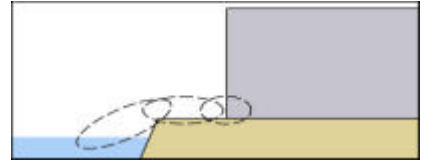
車道からはステージ上の公園は樹木を介し間接的につながり、ステージ部分は河川を特に意識した活動場所となっている。『街』とのつながりが弱まっているが、反面『街』を離れて過ごすスペースとして捉えることもできる。

左例のようなレベル差はなく、ステージ自体は存在しないが、車道と公園の間に約1mの柵が建ててあることと、車道の河川側にある高木が、意図的に人の意識を河川方向へと向かわせていることからステージ型とした。左例と同じく『街』を意識することなく過ごせるスペースである。

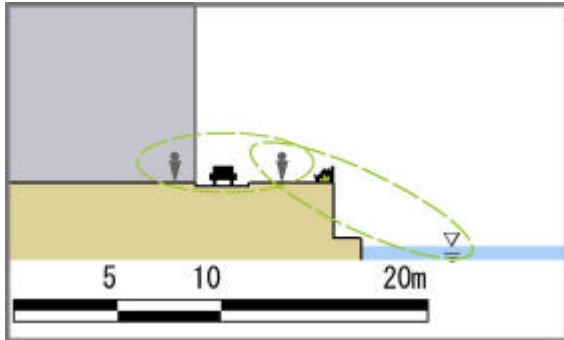
A-3. 近傍型

形態：『街』と『水』が接近しており、2～3つの短い「鎖」で構成されている。

特徴：『節』における活動の多くが「移動」となっており、活動の幅が制限されている。

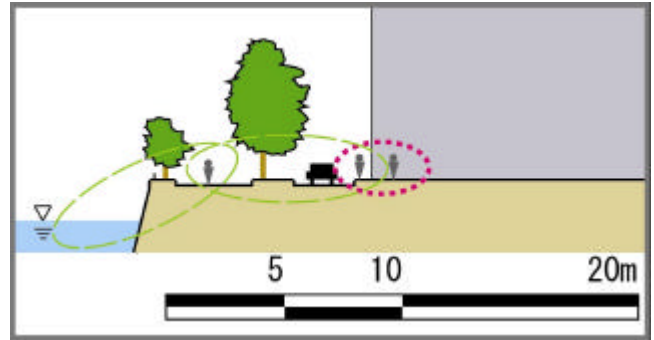


【中島川・左岸①】



『街』から『水』までの距離が短いため往来はしやすいが、活動の幅が限定される例。岸辺に歩道があるため、かろうじて人の活動が見られる。活動内容は、河川を眺めながらの移動が多く、『街』と『水』のつながりは他に比べ若干弱い。

【那珂川・右岸②】

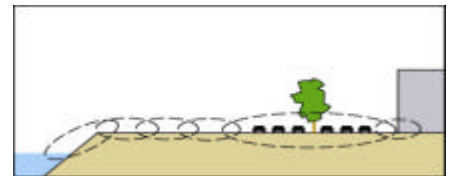


左例と比べると、やや活動スペースが広く設けてある例。しかしこれも河川沿いの歩道において、河川を眺めながら移動する活動が多く見られることから、横のつながりは弱いといえる。また親水型のような活動の幅広さも見られない。

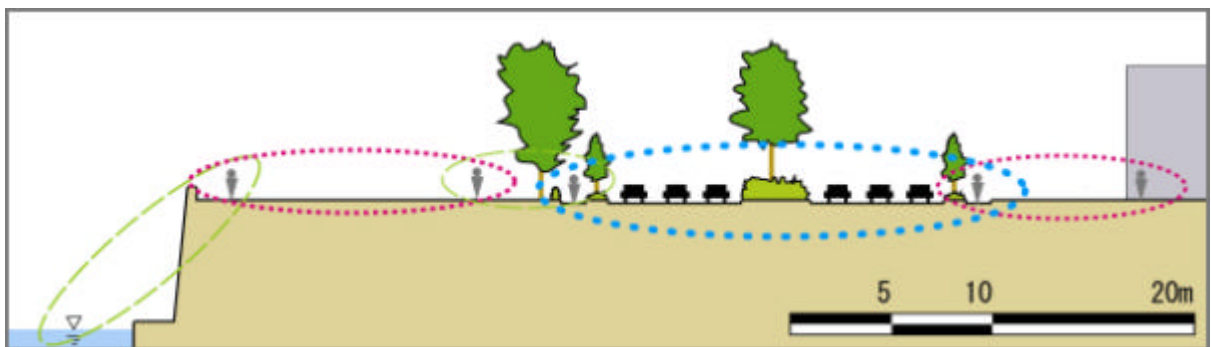
A-4. 延伸型

形態：全体として『街』と『水』の距離が遠く、つながりの弱い大きな「鎖」が間に一つ入っている。

特徴：下の一事例しか見られなかったが、「分鎖型」の例外であり、つながりを切断させない一つの方法である。



【甲突川・右岸③】



間に幅の広い国道が入っており、一見つながりが断たれ「分鎖型」であるかのように見える。しかしこの例では、国道中央に有る高木が象徴的で、車道脇の歩道からは特に印象的に見える。ランドマーク的な要素が強く、人の位置認識の手がかりとなることから⁵⁾かろうじてつながりがあると考え、一つのパターンとして取り上げた。

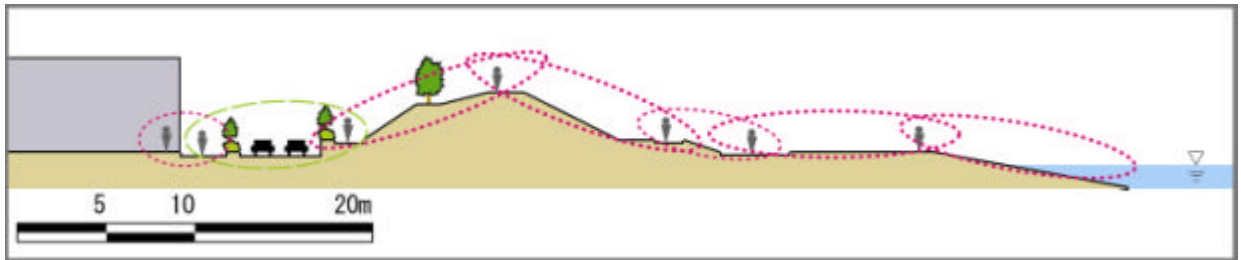
A-5.越丘型

形態：堤防を越えるように「鎖」がつながっている。

特徴：低水敷・高水敷において、ある程度の間隔で流軸に沿った歩道がある。



【大分川・左岸②】



堤防河川に見られる例の一つ、歩道が堤防内に多くあることで、広範囲に広がる低水敷のオープンスペースにおける活動の幅を広げている。堤防を越えるようにして移動の要素が連なり、幅の長いゾーンが間延びしないようにつながりがある。

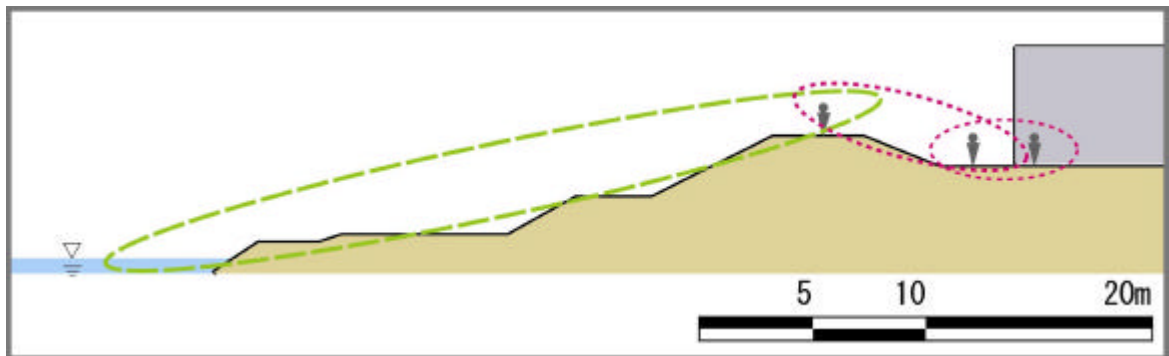
A-6.望河型

形態：堤防敷より河川に大きな「鎖」が一つ入っている。

特徴：低水敷・高水敷に「要素」がなく、堤防敷より河川を眺める活動が主となっている。



【大淀川・右岸①】



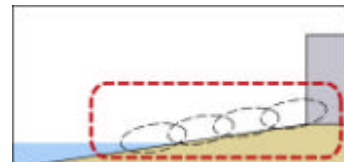
同じく堤防河川に見られる例の一つで、堤防敷から河川への眺望が主な活動となっている。水辺まで向かうにはつながりが弱く、水辺での活動があまり見られない。堤内地の広いオープンスペースが活用されていないといえる。

5-3. 河川活動の偏りによる考察

ここで A-1 より A-6、また B、C、D の全 9 パターンの分類より、各々の『節』における、河川に関する主な活動（以下主活動）とその活動範囲（図中破線太枠）の考察を以下のように行った。この考察より、河川～市街地における人の河川活動の偏りが概念的に把握できる。

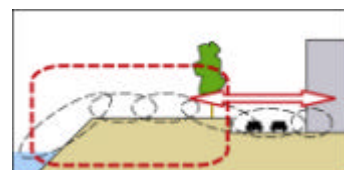
A-1. 親水型

主活動というよりは、『水』に関連した活動全般が見られる。『節』ゾーン全体に渡って河川に関連した活動があり、偏りの無い一体的な空間になっている。



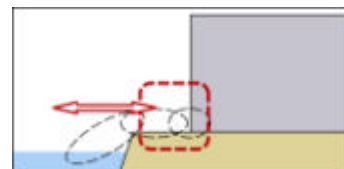
A-2. ステージ型

主活動が親水以外の『水』に関連した活動が多く見られる。河川側に偏りがある活動範囲となっている。『街』ゾーンより河川が感じられるところまで行くのにやや障害があるため、『街』との間に距離ができています。



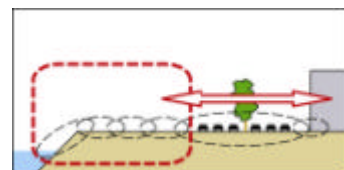
A-3. 近傍型

主活動の大半が河川を眺めながらの移動であり、親水型・ステージ型ほど『水』との関わり方は強くない。そのため『水』ゾーンとは意識的な距離ができ、活動範囲が『街』ゾーン寄りとされる。



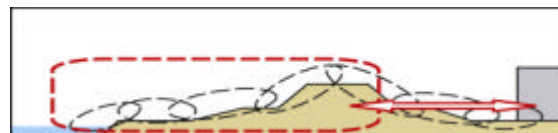
A-4. 延伸型

主活動がステージ型とほぼ同じ様子である。間の障害が大きく、河川を感じるには大きな距離ができ、活動範囲が河川に大きく偏っている。



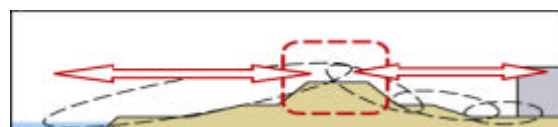
A-5. 越丘型

主活動が親水型と同じく、『水』に関連した活動全般が見られる。ただし、堤防を越えなければならないため、『街』ゾーンとの間にはかなりの距離がある。



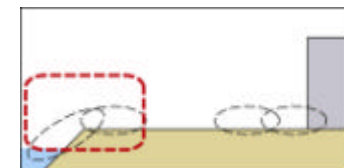
A-6. 望河型

主活動が堤防敷の上よりの眺望のみで、偏りが中間に位置している。『街』・『水』のどちらともあまりつながりが強くない。



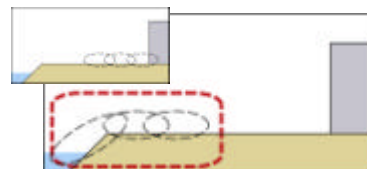
B. 分鎖型

ステージ型や延伸型と同じ主活動の様子だが、『街』ゾーンとのつながりががないために主活動の場が独立している。



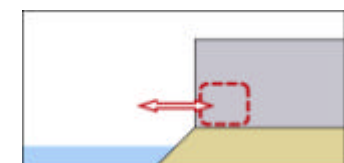
C. 偏鎖型

「鎖」の偏りが河川側にある場合のみ河川に関した活動が見られる。『街』ゾーンとのつながりがあると他の連鎖型のいずれかのパターンにあてはまる可能性がある。



D. 無鎖型

河川とのつながりは本質的にはないが、建物の内部にいる人のみ河川を眺めることができる。『水』ゾーンと『街』ゾーンとのつながりはないが、河川に関する活動はあると考えた。



以上の分析より9パターンの都市河川景観において、河川活動の偏りから河川及び市街地との接し方が分かり、以下の4つに大別した。これは主題である「街と河川の関係」を概念的に示すものである。

I. 河川及び市街地と共に接する体系（主活動：親水活動）

該当型：A-1. 親水型

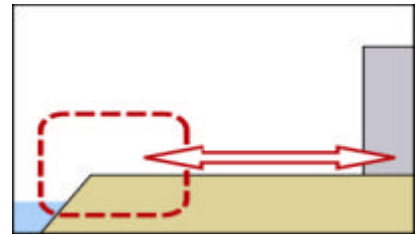
市街地の中に自然を取りこむことで、主活動の場を両義的にしている。河川を市街地の一部として位置付けていることから、両者の間が一体的な空間になっており、良好なつながりをもたらしている。河川～市街地全域に「視覚・往来」の両者に対する配慮がなされていることがポイントである。



II. 河川と接し市街地を望む体系（主活動：休息）

該当型：A-2. ステージ型 A-4. 延伸型 A-5. 越丘型

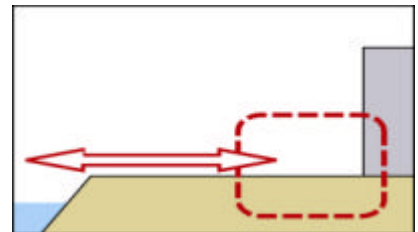
主活動の場が河川に隣接することで、離れた位置より市街地を望む形になると同時に、休息の場として位置付けられる。Iほどではないが休息には十分な河川の情緒を感じることができる。河川と市街地が離れても、切断しないデザイン配慮がポイントである。



III. 市街地と接し河川を望む体系（主活動：観賞）

該当型：A-3. 近傍型 D. 無鎖型

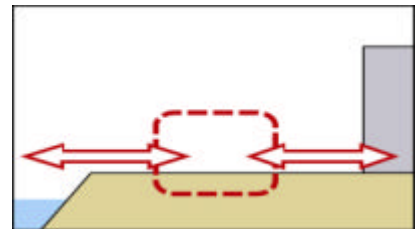
主活動の場が市街地寄りにあり、市街地より河川が感じられるようになっている。河川を観賞することが主活動のほとんどで、「絵」のように位置付けられている。そのため河川まで視覚的に遮らないデザインの配慮がポイントである。またD. 無鎖型は建物の中から眺める活動のみ可能となるため、極端な例としてこの体系に含んだ。



IV. 河川及び市街地を共に望む体系（主活動：観賞）

該当型：A-6. 望河型

主活動の場が市街地からも河川からも離れており、中間的な位置付けにある。IIIと同じく河川が「絵」のように位置付けてあると同時に、やや離れて市街地を望む構成になっている。河川と市街地の両者と離れてはいるが、切断させないデザインの配慮がポイントである。



また、B.分鎖型、C.偏鎖型は、つながりが連続的になればII及びIIIの体系になる可能性があることが分かる。

6. おわりに

ここではこれまで述べたことを要点ごとにおさえ整理し、本研究の結論としてまとめた。

- (1) 横断面図という抽象化した情報より概念的な景観分析を行うことができ、また実際の空間デザインを行う際に活用できることを示した。
- (2) 『街』・『節』・『水』ゾーンという新たな河川～市街地の横断軸上における概念を提案し、『節』ゾーンの重要性を提言できた。
- (3) 構図論的見地からの考察ではなく、実際の空間デザインと同様な「人の活動」を明確にする視点から分析が行えており、河川と市街地の間に「人の活動を促す空間」が必要であることが提案できた。
- (4) 人の活動を「要素」より評価し、「環」の概念より人のアクティビティという見えないポテンシャルを記述可能なものにできた。
- (5) また「鎖」により『節』ゾーンをパターン化することで景観把握が行えた。
- (6) さらにこのパターンを主題別に4つの体系に大別することで、河川と市街地の関係を明瞭にした。

考察

全 40 節中 20 節を連鎖型が占め、河川～市街地の間にある、人のアクティビティに関するポテンシャルは高いということが分かった。しかしそのポテンシャルの利活用に関しては、パターン分類で示した A-1～A-6 で記述するように様々である。ただ少なくとも B,C,D のパターンにおいてはまずポテンシャルを認識する「意識」の向上が必要であり、A-1～A-6 においては個々の目指す利活用に対応した「デザイン」の配慮が必要であると考ええる。

本研究の研究成果としてあげられた9パターンの分類より、現況の都市河川がどの位置付けに属されるか検討し、4つの大別よりどのような活動目的をもって河川と市街地の関係を考えるか、それらのデザイン指標として提案する。

課題として考えられるのは、パターンや体系を規定するに当たって、具体的寸法での考察まで及ばなかったことがまず挙げられる。またここまでは片岸ずつの検討であったため、今後対岸の関係の検討まで広げ、平面図も用いた河川空間全体の考察が必要となることであろう。

謝辞

本研究を進めるにあたって、終始適切なご指導を下さいました小林一郎教授には、感謝しても余りあるものがあります。また適切なご指導とご助言で研究を導いて下さった星野裕司助手に、心から感謝の意を表します。そして、現地調査の際に度々お世話になりました、九州工業大学景観工学研究室の仲間浩一助教授をはじめとする研究室の皆さんには、深く感謝致しております。施設設計工学研究室に配属されてから、公私にわたって非常に充実した生活を送ることができました。これもひとえに諸先輩方と同輩の皆さんのおかげです。ここに深く感謝の意を表して、本研究を終えたいと思います。

平成 14 年 2 月 12 日

<参考文献>

- 1) 中心市街地活性化推進室 HP：<http://www.ias.biglobe.ne.jp/madoguchi-go/> (2002.1)
- 2) 佐々木葉二・曾和治好・村上修一・久保田正一：ベーシック・スタディ ランドスケープ・デザイン，pp116，昭和堂（1998）
- 3) 景観デザイン研究会／篠原修編：景観用語事典，pp182，彰国社（1998）
- 4) 中村良夫：風景学入門，pp110-pp111，中公新書（1982）
- 5) 畔柳昭雄・渡邊秀俊：都市の水辺と人間行動，共立出版（1999）
- 6) 矢萩喜従郎：平面 空間 身体，誠文堂新光社（2000）
- 7) 戸沼幸市：人間尺度論，彰国社（1978）
- 8) 陣内秀信・中山繁信編著：実測術，学芸出版社（2001）